

# カリキュラム開発支援センターの取組みを参考にした 保育者養成校における現任保育者支援のあり方

森 木 朋 佳

A Plan of In-service Education, for Engaged in Early Childhood Education, Referencing to  
the System being Enforced on Curriculum Development Supporting Center Kyoto

Tomoka Moriki

---

本稿は、「京都市総合教育センター カリキュラム開発支援センター」の取組みを取り上げ、現任者支援にあたって大切にされている視点や、支援の枠組みについて検討したものである。 「カリキュラム開発支援センター」は、現職の教職員の資質向上を目的とした施設であり、利用者が「主体的な研修」を行えるよう、様々な配慮・工夫がなされている。同センターが掲げる支援事業の3つの柱は、保育所保育指針が改定され、現任保育者の資質向上への取組みが重要視される今日、現任保育者の研修や支援においても大いに参考になるものである。

**Key words:** [現任者支援] [カリキュラム開発支援センター] [保育の質]

---

(Received September 24, 2009)

## はじめに

2009年4月1日より適用となった保育所保育指針（以下、新保育所保育指針）では、保育の質の向上を図ることの必要性が強調され、組織的な保育の質改善への取組みが求められるようになった<sup>1)</sup>。同時期には、「保育所における質の向上のためのアクションプログラム」が策定され、保育所内外の研修の充実や保育士資格・養成の在り方の見直しについても言及されている<sup>2)</sup>。また、全国保育士養成協議会の示す「成長し続け、組織の一員として協働する、反省的実践家」<sup>3)</sup>という保育者モデルは、“養成段階の教育は「準備教育」であり、完成教育ではない<sup>4)</sup>”ことを前提にしており、現任保育者の資質向上と研修のあり方の検討は、保育者養成に携わるものにとっても重要な課題である。

ところで、京都市総合教育センター<sup>5)</sup>の3階にカリキュラム開発支援センターと呼ばれる施設がある。通称「カリセン」と呼ばれるこの施設は、「学校の主体に基づく確かな教育実践を支援する<sup>6)</sup>」ことを目的に2003（平成15）年4月に政令指定都市として初めて設置、同年7月に開設され、今年で7年目を迎える。この施設の特徴は、年間の利用者が非常に多いことにあ

---

\* 鹿児島純心女子短期大学生活学科こども学専攻（〒890-8525 鹿児島市唐湊4丁目22番1号）

る。1989（平成10）年9月中央教育審議会答申「今後の地方教育行政の在り方について」における、「カリキュラムに関するナショナルセンターの設置を検討すること」<sup>7)</sup>の提案を受け、全国的に教員の資質・能力の向上を目的としたカリキュラムセンターの設置が進められ、「カリセン」と同様の機能を備えた施設が数多く存在する中で、開設3年目の2006（平成18）年にして、年間利用者数が1万人を突破<sup>8)</sup>したという事実は非常に興味深い。利用者数が多いことが、そのまま資質の向上を示すものではないが、利用者すなわち現任者のニーズにあったサービスが提供されていることは容易に推察でき、その点は保育者養成校における現任者の資質向上や、研修のあり方について検討する上で参考になるものと考えられる。

そこで本稿では、「京都市総合教育センター カリキュラム開発支援センター（以下カリキュラム開発支援センター）」の取組に着目し、いかなる点が多くの利用者を生んでいるのかについて検討するとともに、現任保育者の資質向上と研修のあり方について考察する。

## I カリキュラム開発支援センターの概要

### 1 カリキュラム開発支援センター設置までのあゆみ<sup>9)</sup>

まずは、京都市総合教育センターの沿革（表1）と、カリキュラム開発支援センター設置までの変遷について整理してみる（図1）。

京都市総合教育センターは、1951（昭和26）年に京都市教育研究所としてスタートし、教育に関する調査・研究を担うとともに、1963（昭和38）年にはカウンセリングセンターを統合し、教育相談の機能を持つようになる。その後、京都市立永松記念教育センターとして、京都市教育研究所の機能を受け継ぎ、研修・研究・相談・学校訪問指導の機能を果たし、2003（平成15）年には京都市総合教育センターへと名称変更するとともに、教育相談機能を総合教育相談センター（パトナ）として独立、カリキュラム開発支援センターの設置を経て、現在に至っている。

平成21年4月現在の京都市総合教育センターは、指導室・研修課・研究課・カリキュラム開発支援センター・教員養成支援室・下京渉成小学校開設準備室・開晴小中学校開設準備室・学校統合推進室・計画課・計画係によって組織されている。したがってカリキュラム開発支援センターは、京都市総合教育センターの1部署という位置づけとなる。

京都市教育研究所時代から、教育の諸問題について調査・研究を行う研究室と、関連する図書・資料等を収集した情報資料室が設置されており<sup>10)</sup>、時代に合わせて機能の充実・拡大は図られているものの、教育センターとして早くから調査・研究機能を持ち、関連資料が収集されていたことが伺える。

カリキュラム開発支援センターは、先に述べたように「カリキュラムに関するナショナルセンターの設置<sup>11)</sup>」の提言を受けて設置された。提言のあった1989（平成10）年には、京都市における「カリキュラムに関するナショナルセンター」の設置に向けての検討がスタートしている<sup>12)13)</sup>。設置構想において、「教育改革における教職員の資質向上を図る<sup>14)</sup>」ことを目的としながらも、いわゆる上からの研修ではなく、学校・教職員が主体となることに重点がおかれ、カリキュラム開発支援センターは、これまでに蓄積された人的・物的な資源が活

カリキュラム開発支援センターの取組みを参考にした保育者養成校における現任保育者支援のあり方用される場として位置づけられた。その結果、「よりよい授業の創造 “Planning”」、「適切なアドバイス “Advice”」、「必要な情報の入手 “Research”」の3つを柱として、設置準備が進められる<sup>15)16)</sup>。

表1 京都市教育センターの沿革<sup>17)</sup>

		沿革
1951 (S 26)	4. 1	「京都市教育研究所」を設置
1963 (S 38)	4. 1	「カウンセリングセンター」を設置
1983 (S 58)	3.26	教育研究所にカウンセリングセンターを統合
1986 (S 61)	11.15	教育研究所を廃止
		研修・研究・相談・学校訪問の機能を持つ「京都市立永松記念教育センター」を設置
2003 (H 15)	4. 1	「京都市総合教育センター」に名称変更、「カリキュラム開発支援センター」を設置
2008 (H 20)	4. 1	「教員養成支援室」を設置

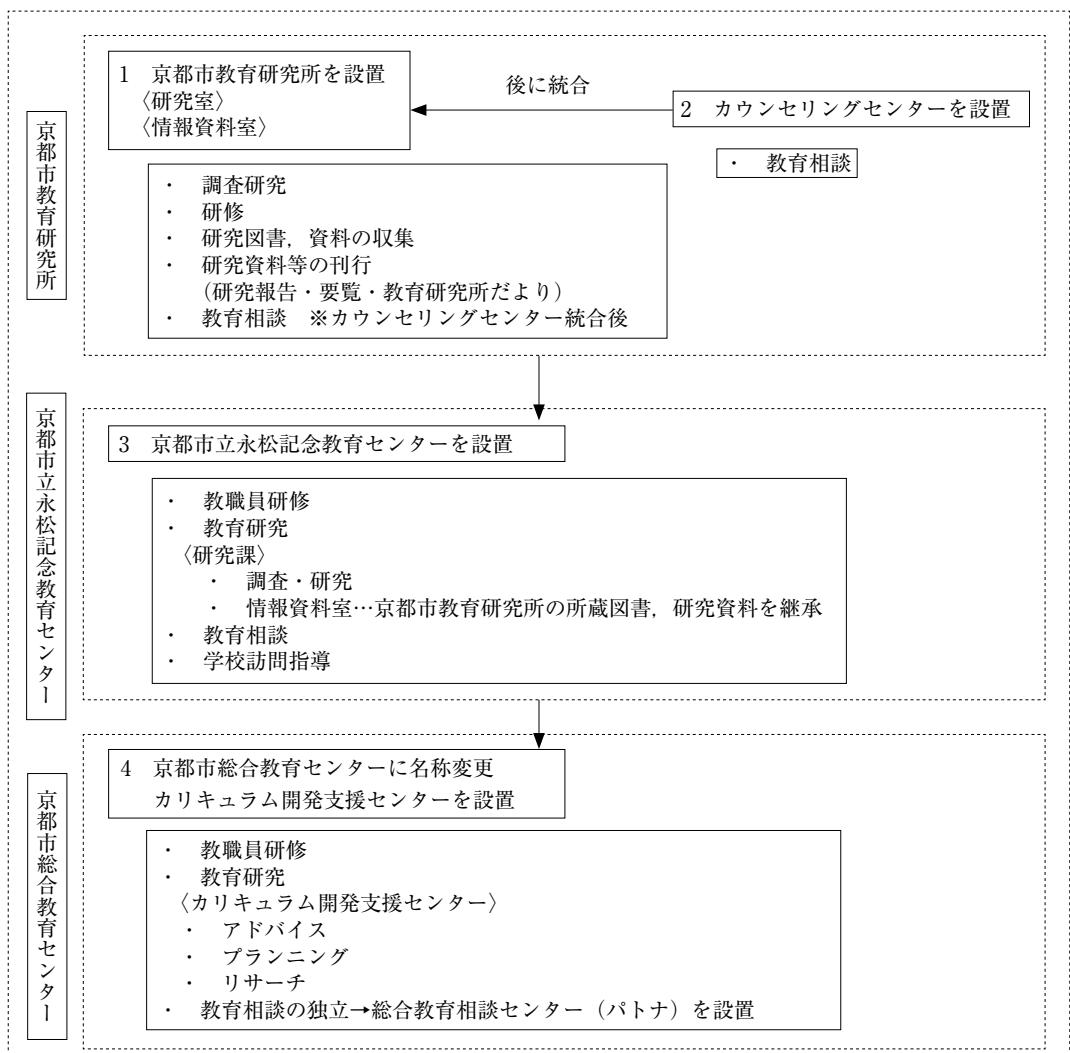


図1 カリキュラム開発支援センター設置までの京都市総合教育センターの変遷<sup>18)</sup>

## 2 カリキュラム開発支援センターの概要<sup>19)</sup>

次に、カリキュラム開発支援センターの概要について、設備面と事業内容から整理してみる(図2)。

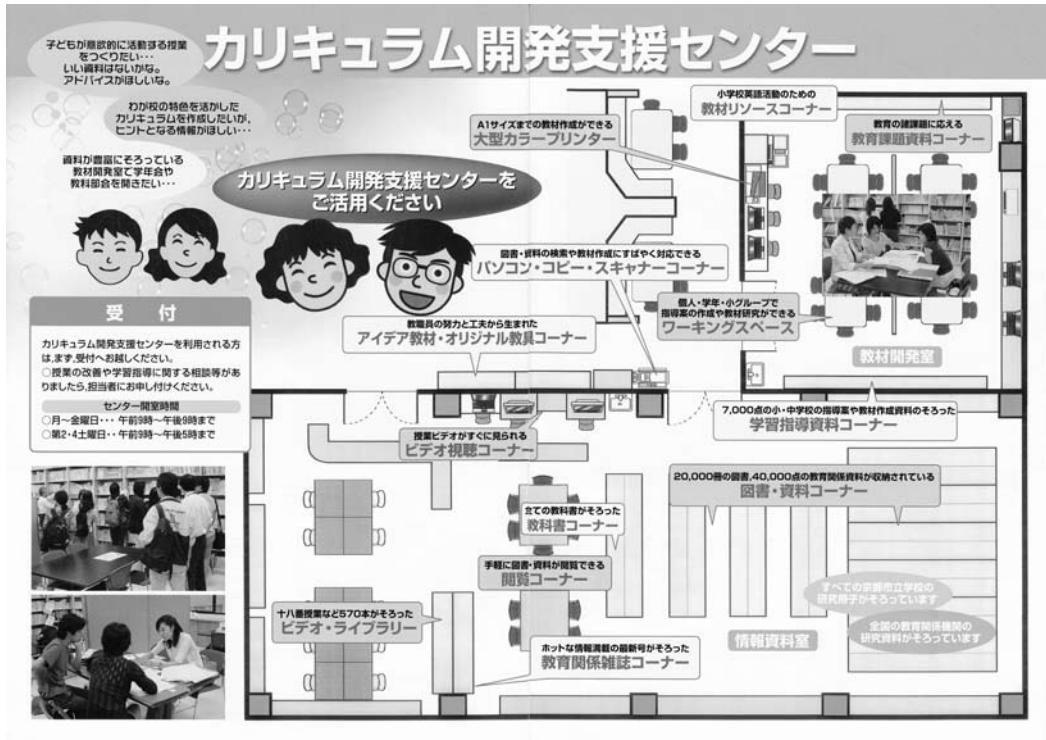


図2 カリキュラム開発支援センターの構成<sup>20)</sup>

### (1) 施設概要

#### 1) 設置場所

京都市総合教育センター 3階 (京都市下京区河原町通仏光寺上ル)

#### 2) 設備

##### ① 情報資料室

- ・ 教育関連図書
- ・ 教育関連雑誌 (約50種類: 既刊・新刊)
- ・ ビデオライブラリー (授業ビデオ「十八番授業」, エルネットで配信された講演ビデオ, 京都市総合教育センターによる研修講座ビデオ等)
- ・ 教育関連資料 (京都市立学校研究冊子, 各研究会刊行物, 全国教育関係機関研究資料等)
- ・ ビデオ視聴コーナー
- ・ 閲覧コーナー

カリキュラム開発支援センターの取組みを参考にした保育者養成校における現任保育者支援のあり方

② 教材開発室

- ・ 学習指導資料コーナー（小・中学校の学習指導案、幼稚園の指導計画、指導案作成・教材作成関連図書、各地の教育機関作成の指導事例集等）
- ・ 学習用ソフトコーナー（教材用ビデオ、CD、DVD等）
- ・ 教材リソースコーナー（小学校英語活動支援教材）
- ・ 情報機器コーナー（所蔵図書や指導案の検索、資料作成用パソコン、コピー、スキャナー、カラープリンター、大判カラープリンター）
- ・ ワーキングスペース

3) 利用時間

平日：午前9時～午後9時

土曜：午前9時～午後5時

4) 利用対象者<sup>21)</sup>

- ・ 京都市教育委員会の所管に属する学校の教職員
- ・ 京都市の区域内に住所を有する者
- ・ 京都市教育委員会が適当と認める者<sup>22)</sup>

5) 組織

- ・ センター長
- ・ 担当課長
- ・ 指導主事（4名；他の課と兼職）
- ・ 専門主事（5名）
- ・ 主事

6) 研修事業

カリキュラム開発支援センターが主催する主な研修は以下のとおり。

- ・ 校内研究サポート講座
- ・ カリキュラム相談会
- ・ フレッシュせんせい授業交流会

7) その他

- ・ 「NEWSLETTER<sup>23)</sup>」などによる情報の発信
- ・ 情報資料室、教材開発室の維持及び管理

(2) 情報資料室について

情報資料室には、教育関連図書・雑誌、京都市立の学校の研究冊子などの研究成果物、授業改善、校内研修を支援するための研修用ビデオ等の資料が所蔵されている。また、ビデオ視聴コーナー、資料閲覧コーナーが設置されており、利用者がその場で資料を確認することができる。情報資料室は教育研究所時代にすでに存在しており、京都市立永松記念教育センター時代には、教育関連図書・ビデオテープの貸し出しや、各学校の研究冊子、学習指導案の閲覧・コピーが可能であった。カリキュラム開発支援センターを設置するにあたり、これまでの情報資料室が果たしていた機能はそのまま引き継がれた。

現在、情報資料室・教材開発室で利用可能な資料は、教育図書では1万7千冊、学習指導案では1万4千点に上る（表2）。

表2 カリキュラム開発支援センターの所蔵資料数

	所蔵数
教育図書	17,000冊
研修用ビデオ	800本
学習教材	1,400点
教育関係資料	46,000点
学習指導案	14,000点

### （3）教材開発室について

「確かな授業作り」を支援することを目的に、新たに設置された教材開発室では、京都市立学校の学習指導案や、教材作成のための資料、教材用ビデオ・CD・DVD等の資料が閲覧・コピー可能である。また、パソコンやスキャナー、A1サイズまで対応できる大判プリンターが備えられており、図書・資料検索や教材作成ができるようになっている。さらに、個人や小グループで利用できるワーキングスペースも設置されている。

## 3 カリキュラム開発支援センターの設備・運用上の工夫

先にも述べたように、カリキュラム開発支援センターは、「ナショナルセンターの設置」構想を受けて設置された施設であり、名称こそ異なるものの、全国にカリキュラム開発支援センターと同じ位置づけの「カリキュラムセンター」はいくつも存在する。しかしながら、カリキュラム開発支援センターは、表3に示すように2006（平成18）年には年間利用者数が1万人を超えた。これは、月平均800人程度の利用があることを意味しており、利用者の多さという点では他の施設と一線を画している。そこで、ここではカリキュラム開発支援センターの設備や運用上に見られる工夫について検討してみたい。

まず注目したいのは、利用時間である（表4）。カリキュラム開発支援センターは公立の施設であるが、平日は9時～21時まで、土曜日も9時～17時まで利用可能である。カリキュラム開発支援センターのある京都市総合教育センターも、土曜日以外は9時～21時まで利用できる。多くの公官庁の利用時間が平日9時～17時であり、例えば、神奈川県総合教育センターにも「カリキュラム開発センター」が設置されているが、利用時間は8時30分～17時15分、もしくは19時15分までである<sup>24)</sup>。表3に示したようにカリキュラム開発支援センターの利用者の殆どが、小学校・中学校等の教員であることを考えると、平日の9時～17時という時間帯は勤務時間であり、利用が制限される。しかしながら17時以降、しかも21時まで利用が可能であれば、勤務を終えて利用が可能であるし、資料の閲覧や教材の準備に十分時間を見ることができる。

カリキュラム開発支援センターの取組みを参考にした保育者養成校における現任保育者支援のあり方

表3 カリキュラム開発支援センターの利用者数と内訳<sup>25)</sup>

	利用者数(人)	小学校教員(%)	中学校教員(%)	幼稚園・総合養護学校・高等学校教員(%)	その他(学生等)(%)
2003 (H15)	4,281	68.3	8.6	6.2	16.9
2004 (H16)	6,248	67.3	9.3	5.4	18.1
2005 (H17)	8,472	54.3	10.2	3	33.4
2006 (H18)	10,009			※ データ未入手	
2007 (H19)	10,133				

表4 カリキュラム開発支援センターの利用時間

開室時間	カリキュラム開発支援センター(京都市)	カリキュラム開発センター(神奈川県)
平日	9:00~21:00	(月・水・金) 8:30~17:15 (火・木) 8:30~19:15
土曜日	9:00~17:00	(第2・第4) 8:30~17:15
閉室		日・祝日, 年末年始(12/28~1/4)

次に注目したいのが、ワーキングスペースが確保されている点である。先にも述べたように、カリキュラム開発支援センターには、図書・ビデオの閲覧コーナーや、その場で教材作成ができるスペースと設備が準備されている。コピー・スキャナーだけでなく、A1まで対応できる大判プリンターも設置されていて、これらは無料もしくは安価で利用できる。特に大判プリンターはどの学校にも設置できるというものではないため、クラス単位で提示する教材を作成しようとする教員にとって、利用価値の高いものである。

情報資料室や教材開発室を利用する人の中には、差し迫った理由ではなく自己研修のために利用する人もあるであろうが、利用者の多くは具体的な課題を抱えていたり、授業のヒントや手がかりをなんとか得ようとしていたりして、いわば必要に駆られて足を運ぶ人も多いのではないかだろうか。そうした利用者が、何からヒントや手がかりを得たり、あるいは手ごたえを感じる教材にあつたりしたとき、その場でもう少し作業を進めたいと思うのではないか。また、資料を自宅や職場に持ち帰っての作業では、新たな資料が必要と感じたとき作業が中断されてしまうし、再度カリキュラム開発支援センターに足を運ぶ時間が確保できるとは限らない。そう考えると、その場で資料入手でき、教材作成ができるという環境は、利用者のニーズを的確に捉えて準備された環境であるといえよう。

最後に注目したいのは、資料の利用のしやすさである。教材開発室にある学習指導案は、京都市の幼稚園・小・中学校、総合養護学校の研究発表会などで作成されたものをカリキュラム開発支援センターが収集したもので、学校の種別、教科ごと領域ごとに分類されており、利用者が資料としてすぐに利用できるように整理されている。また、所蔵点数が多いため、同じ単元の学習指導案を比較検討することも可能で、教材研究や参考資料として利用しやすい。これ以外にも、小学校・中学校で作成され、総合教育センターの担当指導主事が選定し

た学習指導案をPDF形式で保存し、京都市立学校向けのネットワーク上においてオンライン版指導案も整備されている<sup>26)</sup>。また、所蔵の図書・雑誌は通常の図書館同様データベース化されており、検索システムを用いた検索が可能である。

このように、カリキュラム開発支援センターが掲げる支援の3つの柱、すなわち「よりよい授業の創造 “Planning”」、「教材教具の開発・作成 “Produce”」、「必要な情報の入手 “Research”」が、具体的な形で実現され、運用されていることが分かる。また、いかに豊富な資料を揃え、設備が充実していても、利用者が利用できる条件が整っていなければ、支援の3つの柱は機能しない。単に資料を公開し設備を整えるだけでなく、有効活用されるよう、利用時間はじめとする利用のニーズを十分に考慮されていることが、利用者数月平均800人、年間1万人という数字に表れているのではないか。

## Ⅱ 「フレッシュせんせい授業交流会」に見る現任者支援のあり方

ここでは、カリキュラム開発支援センターが主催する研修事業を取り上げ、現任者支援において大切にされている事柄について検討してみたい。

### 1 「フレッシュせんせい授業交流会」事業の概要

#### (1) 平成18年度の実施状況<sup>27)</sup>

「フレッシュせんせい授業交流会」は、非常勤講師や採用1～5年目の教員を対象としたカリキュラム開発支援センターが実施している研修事業のひとつである。平成18年度は「確かな授業づくりを進めるために」を年間テーマに、2ヶ月に1回のペースで計6回実施された。その具体的な実施状況は以下のとおり。

表5 平成18年度「フレッシュ先生授業交流会」実施状況

実施	時間	テーマ
第1回	5/19(金) 18:45～20:30	「学級」を「学習集団」に高めるためにどのような工夫や取組をしているか
第2回		子どもたちを豊かに理解するためにどのような工夫や取組をしているか
第3回		「教材研究」を進める上で大切にしてきたこと
第4回		子どもたちの学習意欲を高めるために板書をどのように工夫してきたか
第5回		こどもたちが活発に発言できるようにどのような工夫や取組をしてきたか
第6回		確かな授業作りを進める上で日々大切にしてきたこと

#### (2) 当日の流れ

「フレッシュせんせい授業交流」会当日の流れを図式化すると、図3のようになる。

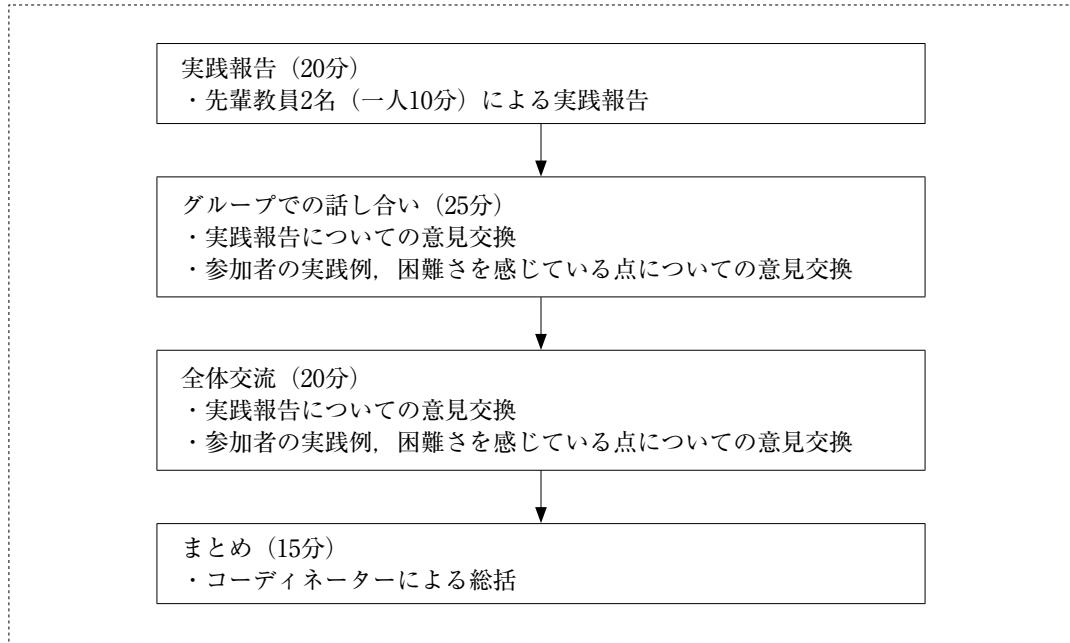


図3 「フレッシュ先生授業交流会」当日の流れ

図のように、「フレッシュせんせい授業交流会」は、先輩教員による実践報告と参加者による意見交流によって展開されている。研修というと実践報告や講話が中心になりやすいが、どちらかというと、参加者同士の意見の交流に重点がおかれているようである。平成18年度の実施では、ピンク・青・黄色の3色の付箋に参加者が感じたことを記入し、意見を出し合うという方法が採用されている。また、当日の研修会の様子や、交流の場で出し合われた意見などは、後日「フレッシュせんせい授業交流会 通信」にまとめられ、発信されている。

## 2 「フレッシュせんせい授業交流会」に見られる工夫

「フレッシュせんせい授業交流会」は、1年目～5年目の「フレッシュせんせい」を主な対象とした研修事業である。この事業について筆者が注目したのは、研修時間、各回のテーマ設定、そして参加者の交流に重点が置かれていることの3つである。

研修時間は18時45分～20時30分に設定されており、先に述べたカリキュラム開発支援センターの利用時間と同様、対象者が通常の勤務を終えた後に参加可能な時間に設定されている。先にも述べたが、参加者が参加できる条件が整えられていなければ、研修としての意味を成さない。この点から考えると、設定された研修時間は参加者が参加しやすい条件を考慮したものであり、参加者が研修を受ける権利を保障するという支援の1つといえる。また、「フレッシュせんせい授業交流会」は事前の参加申し込みが不要である。この点については推察に過ぎないが、利用者にとっては利用しやすい枠組みのように感じる。参加の申し込みが必要であれば、勤務時間外にも対応すべき事柄が多い学校の教員は、参加できない場合を

考えて申し込みを控えることも予想されるが、不要であれば、時間がとれたときに参加しようという気持ちを持つことができ、参加する側の気持ちの面での負担が軽減される。主催する側にとっては、人数の把握ができないため、例えば資料の準備が必要な場合に、不足あるいは余剰が生じたり、会場に対して参加者が多すぎたり少なすぎたりするなどの問題が生じるが、申し込み受付の事務処理が不要となるので、主催側にもメリットがある。

各回のテーマは、教室で展開される授業場面を想定し、「フレッシュせんせい」が直面しそうな壁や疑問という視点から設定されており、参加者が興味・関心を持ちやすいものであると考えられる。テーマ設定にあたっては、当然カリキュラム開発支援センター設立以前の研修のノウハウや研究成果がいかされているであろうし、企画者は、教育の現場をよく知る教員経験者であるので、参加者のニーズに直結したテーマ設定となっているものと考えられる。

また、参加者の交流に重点が置かれており、いわゆる「聞く」タイプの研修ではなく、参加型の研修で、カリキュラム開発支援センターが大切にしている「主体は教職員」という視点が生かされている。さらに、グループワークの際には、見知らぬ人同士でも意見が述べやすく、後で振り返りやすい付箋紙を用いた方法を採用することで、限られた時間を活用しようという工夫が見られる。1年目～5年目という幅はあるものの、同じ「フレッシュせんせい」間でのやり取りであれば、同じ悩みや壁を感じている人がいて当然であるし、参加者同士が出し合う実践例は、ベテランの先生から伝授されるものよりも、「授業のツボ」、「授業のコツ」として無理なく取り入れられるものであろう。そのようなやり取りや、似たような立場にあるもの同士の共通体験から、人と人のつながりも生まれ、お互いに高めあったり、相談しあったりする関係に発展する可能性は容易に想像できる。こうした参加者間のネットワークの構築は、主催者側が意図したことではないかもしれないが、現任者を間接的に支えるものとして機能しているのではないか。

#### **IV カリキュラム開発支援センターの取組みを参考にした現任者支援のあり方**

これまでカリキュラム開発支援センターの取組みを取り上げ、その内容と工夫されている点について検討してきた。その結果、カリキュラム開発支援センターでは、支援の事業の3つの柱に基づいて事業展開がなされていること、いわゆる上からの研修でなく、「主体は教職員」であり、自主的な研修の場として機能することに重点がおかれていていること、同センター利用者が利用したり研修したりしやすい枠組みを持っていることが明らかになった。全国的な流れの中で設置された施設であるが、他の都道府県に見られる「カリキュラムセンター」や「カリキュラム開発センター」ではなく、同センターの名称が、カリキュラム開発「支援」センターであることの意味は、ここにあるように思われる。

全国保育士養成協議会専門委員会は、新保育所保育指針の策定にあたり、保育士の資格や研修の在り方についても見直しを行う必要があるとの指摘について、「質の高さは、働きながら保ち、あるいは働き続けながら向上させていくということを前提とした言明である」とし、「職場内において次の世代の保育者を育てる仕組みや働きかけが行われているかいないかは、保育

カリキュラム開発支援センターの取組みを参考にした保育者養成校における現任保育者支援のあり方の質確保・向上にとって大変重要」とした見解を示している<sup>28)</sup>。カリキュラム開発支援センターの取組みは、現職の教員を対象としており、働きながら質を保つ、あるいは向上させるシステムとして大いに参考になる。

保育者養成校において、現任者の資質向上及び研修を目的とした支援を行うにあたって、カリキュラム支援センターが持つ支援の枠組み、すなわち、「研修に参加したり、利用したりできる条件を整えること」、「必要な情報が入手できること」、「情報をその場で利用、活用できること」、「適切な助言が受けられること」が利用できる。具体的には、現任保育者の勤務条件などを考慮し、勤務時間外に利用しやすい時間設定を行うこと、保育関連図書・雑誌や保育指導案の収集と公開、実務経験者あるいは専門的知識を備えた相談員の配置、ワーキングスペースの確保等が考えられる。

例えば短期大学等の保育者養成校の場合、保育関連図書・資料の収集をすることは、養成課程にある学生にとっても有益である。また、保育指導案を収集することで、現任保育者に参考資料として提供できるだけでなく、今後保育者になろうとする学生にとっても参考資料となる。さらに、現任の保育者が、保育園協会などの主催する集団での研修会以外の場で、保育者養成校と関わりを持つことは、現場と養成校をつなぐことにもなる。現任保育者にとって「自主研修」や「学びなおし」等、資質向上につながり、養成校にとって、保育現場の現状や現場の声を吸い上げる機会となる。あるいは「フレッシュせんせい授業交流会」のように、研修に参加することにより、人ととのつながりが生まれることで、特に新任者同士のつながりができることによって、お互いに高めあったり、時には相談しあったりする関係が築かれ、「働き続ける」ことを間接的に支援することにもつながるのではないだろうか。

## おわりに

2006（平成18）年にカリキュラム開発支援センターを視察する機会を得た。筆者は短期大学における保育者養成に関わっており、2年間でどれだけのことができるか、すなわち卒業後、現場での保育の質をどの程度担保できるのかということや、養成校で行われている保育者養成は、現場のあるいは地域のニーズにあっていいるのかという思いを持っていた。そうした自分にとって、カリキュラム開発支援センターの取組みは示唆を得られるものであった。

現在、現任者を支援する段階までには至っていないが、筆者が管理責任者となっている「保育実習準備室」は、視察後、カリキュラム開発支援センターにおける支援事業の3つの柱を参考に整備し、学生に提供している。図4は、短期大学等の保育者養成校の役割について、「学生の教育」「現任者支援」「地域への貢献」の視点からそれらの関係性を示したものである。今後は地域との連携や卒後教育を視野にいれながら、充実をはかれればと考えている。

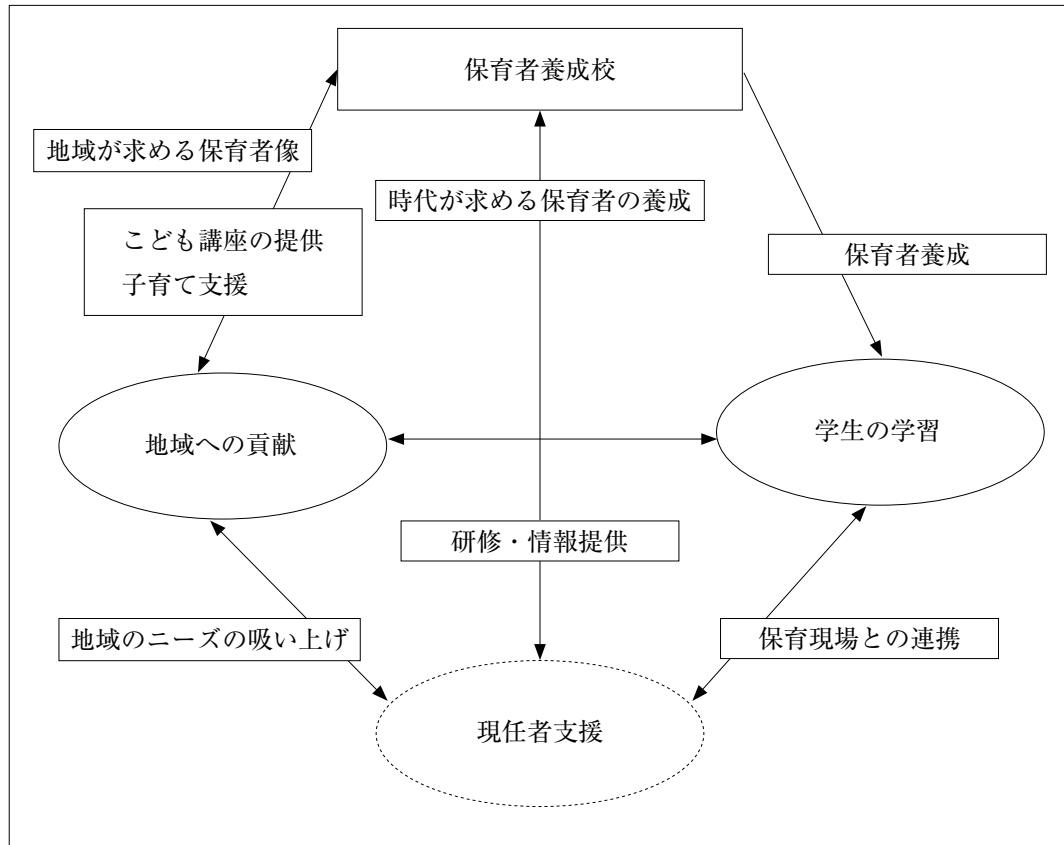


図4 保育者養成校の役割

## 注

- 1) 平成20年度厚生労働省告示第141号
- 2) 「厚生労働省雇用均等・児童家庭局長通知」(雇児発0328001号 平成20年3月28日)の「保育所保育指針等の施行等について」では、「第3 保育所における質向上のためのアクションプログラム関係」において、保育の質の向上に関する取組みの概要等が示されている。
- 3) 全国保育士養成協議会専門委員会(2006) 保育士養成システムのパラダイム転換－新たな専門職像の視点から－ 保育士養成資料集 第44号 138頁
- 4) 全国保育士養成協議会専門委員会(2007) 保育士養成システムのパラダイム転換Ⅱ－養成課程のシークエンスの検討－ 保育士養成資料集 第46号 53頁
- 5) 京都市下京区河原町通仏光寺上る Tel 075-371-2341
- 6) 松下佳弘(2004) 京都市の「カリキュラム開発支援センター」の取組から 京都教育大学サテライト教室開設記念シンポジウム 第3回「現場教育を考える」当日配布資料
- 7) 「今後の地方教育行政の在り方について(中央教育審議会 答申) 第1章 2 国の役割及び国と地方公共団体との関係の見直し『具体的改善方策(国の事務等の減量・効率化を図

カリキュラム開発支援センターの取組みを参考にした保育者養成校における現任保育者支援のあり方  
る観点からの見直し)』において提言されている。

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/12/chuuou/toushin/980901.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/12/chuuou/toushin/980901.htm)

- 8) カリキュラム開発支援センター受付で配布されている利用案内（2008版）による
- 9) 井上新二（京都市総合教育センター カリキュラム開発支援室担当課長（当時））による、「カリキュラム開発支援センターについて」の覚書（2006.11.3.）
- 10) 前掲9) によると、規模は小さいながらも、国語科の指導方法に関する研究等、教育現場の実践力に密着した研究活動が行われていたようである。また、情報資料室は、京都市市立明倫小学校の1教室に設置されていたようである。
- 11) 前掲7)
- 12) 京都市総合教育センター、研究課・カリキュラム開発支援センター広報誌「NEWSLETTER」第60号（平成15年7月18日）に、カリキュラム開発支援センター開設までに4年の準備期間があったことが記されている。
- 13) 前掲7)
- 14) 前掲6)「1 設置趣旨」参照
- 15) 前掲7)
- 16) カリキュラム開発支援センターの利用案内（2004.9）に、支援事業の三つの柱が記載されている。2005年版では、「確かな授業力」をキーワードに、アドバイスに変わって「教材教具の開発・作成 “Produce”」の言葉が記載されている。
- 17) 京都市総合教育センターホームページより、沿革参照。  
[http://www.edu.city.kyoto.jp/sogokyoiku/center\\_shokai/enkaku/index.htm](http://www.edu.city.kyoto.jp/sogokyoiku/center_shokai/enkaku/index.htm)
- 18) 前掲9)を参考に作成。カリキュラム開発支援センター誕生までの経緯が記載されている。
- 19) 前掲8) 前掲9)
- 20) 前掲8) より転載
- 21) 京都市教育センター条例参照  
[http://www.city.kyoto.jp/somu/bunsyo/REISYS/reiki\\_honbun/k1020986001.html](http://www.city.kyoto.jp/somu/bunsyo/REISYS/reiki_honbun/k1020986001.html)
- 22) 2006（平成18）年よりスタートした京都市教育委員による「京都教師塾」の塾生ガイドに、塾生もカリキュラム開発支援センターの利用が可能とある。
- 23) 「NEWSLETTER」は、京都市総合教育センターの広報紙で、京都市立永松記念教育センター時代の2001（平成13）年5月16日に第1号が発信されている。
- 24) 神奈川県立総合教育センターホームページ参照  
<http://www.edu-ctr.pref.kanagawa.jp/karisen/index.html>
- 25) カリキュラム開発支援センター受付で配布されている利用案内 2004年版、2005年版、2006年版、2008年版のデータを参考に作成。（2007年版は未入手）
- 26) カリキュラム開発支援センターホームページ、「学習指導案！」の項目を参照。  
[http://www.edu.city.kyoto.jp/sogokyoiku/curri\\_c/plans.html](http://www.edu.city.kyoto.jp/sogokyoiku/curri_c/plans.html)
- 27) 平成18年度「フレッシュせんせい授業交流会」案内ちらし（第1回～第6回）
- 28) 全国保育士養成協議会専門委員会（2009） 指定保育士養成施設卒業生の卒後動向及び業務実務の実態に関する調査」報告書 I - 調査結果の概要 - 7頁～8頁

